

子どもの権利についての学生の認識

本山 芳男

Recognition of Students about Children's Rights

Yoshio MOTOYAMA

1 研究の目的

子どもの権利に関する条約が日本において批准されて21年目を迎える。私は、乳幼児から大人まで、そして障害の有無に関係なく支援の羅針盤は権利であり、保育士を目指している学生がこのことを十分に理解し、子どもと関わるが必要不可欠だと思っている。

そこで本研究では、学生の子どもの権利への認識を把握し、今後の授業展開を考える一助とすることを目的とする。

2 方法

(1) 対象 A 短期大学 171 名 (177 名にアンケート実施したが、無記入箇所のあった 6 名を除いた)

(2) 調査 平成 27 年度東京都私学助成研究で使用したアンケートを一部改変したものにより実施

(3) 実施時期 平成 27 年 7 月 21、22 日

(4) 分析の方法

質問ごとに χ^2 検定による量的分析並びに自由記述の質的分析を行う。

3 結果

(1) 質問 1

山田さん(仮名)は、高校卒業後の進路などに関して、子どもの希望を優先させるのではなく、親の能力や社会的地位に見合ったところを、教師は子どもにすすめたほうが良いと思っています。

① 量的側面

表 1-1 のアは「そう思う」、イは「どちらかと言えばそう思う」、ウは「どちらとも言えない」、エは「どちらかと言えばそう思わない」、オは「そう思わない」を示している(以下、表 2、3、4、5、6、7、8、9、10 の - 1 の表記は同じとする)。

表 1-1 は、この質問に対しての回答数を表したものである。回答数の少ないア、イを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があった ($\chi^2 = 90.33$ d f = 2 $P < .05$)。さらに「どちらとも言えない」を除いた二つの回答項目において χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があり ($\chi^2 = 47.80$ d f = 1 $P < .05$)、オ「そう思わない」が多いことを示している。

表 1-1 質問 1 における回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	2	0	7	37	125	171

② 質的側面

表 1-2 から表 1-5 は、学生の記述を類別したものである。表題後の () は、分母に回答数、分子に理由を記述した学生数を、囲みの中の【】は、学生の記述を類別した内容を、その後の数字は、分母に記述した学生数、分子に類別に該当する学生数を示し、そして【】の下に記載内容は、学生の記述である（以下、質問 2 以降の質的側面も同じとする）。

表 1-2 「そう思う」2 名、表 1-3 「どちらとも言えない」5 名、そして表 1-4 「どちらかと言えばそう思わない」13 名（13/36）の計 20 名は、親等の状況も無視できないという内容を含んでいた。

それに対して表 1-4 「どちらかと言えばそう思わない」23 名（23/36）と表 1-5 「そう思わない」107 名（107/125）の計 130 名は、「子どもの意見の尊重」を理由に挙げていた。さらに表 1-5 「そう思わない」の 18 名（18/125）は、「子どもの意見の尊重」と「差別の禁止」という二点を理由に挙げていた。

表 1-2 そう思う（2/2）

【子どもの気持ちを優先する大前提として、親の経済的状況を踏まえることも大切】
2/2

- ・子どもの気持ちを優先するが、それを支えてくれる親のことを考えて、奨学金のある学校かを調べてあげるほうが、その子ども自身もより良い

進路を進めることができる。

- ・必ずしも子どもの希望をとおすことが最善の利益とは思えない。親がすべてを決めてしまうのも子どもの人権を無視していることになると思う。

表 1-3 どちらとも言えない 5/7

【子どもの気持ちの尊重と親の状況を考慮するという両面性】 5/5

- ・見合ったところを教師が提案するのも良いが、その子の気持ちをもっと考えた方が良い。
- ・子どもの人生なので子どもが決めるべき。社会的地位を考えて進めることも子どものためなのでよいが、最終的に子どもが決めることなのでどちらとも言えない。

表 1-4 どちらかと言えばそう思わない（36/37）

【子どもの気持ち最優先させるが、親等の状況も無視はできない】 13/36

- ・希望は大切だけど、留学したいと子どもが言ってすぐにお金が出せるわけではないし、あまり稼がない家庭に無理やりそのようなことは出来ないから。
- ・子どもの希望を最優先させるべきだが、現状では、親の能力や社会的地位など全く無視できるものではないからです。

【子どもの気持ちを最優先】 23/36

- ・子どもの希望を優先させるのがとにかく大切。
- ・なるべく子どもの希望を尊重したい。

表 1-5 そう思わない (125/125)

【子どもの気持ちを最優先】 107/125

- ・その子のやりたいことの背中を押してあげることがその子のためになる。
- ・その子の人生はその子のもの。進みたい進路に進み自分の力で人生を豊かなものにすることが生きていく価値につながる。

【差別の禁止、意見の尊重】 18/125

- ・能力や地位によってその子の可能性を制限することはもったいない。子どもが能力や社会的地位で諦めているとしたら、教師は子どもの背中を押す役割を担ってほしい。
- ・社会的地位に見合ったところは差別に当たる。自己決定することが大切。

(2) 質問 2

山田さん(仮名)は、乳児や知的に障害をもっている子どもには、その子どもの気持ちを考えることより、大人が最善だと思うことをしてあげればよいと思っています。

①量的側面

表 2-1 は、質問 2 に対しての回答数を表したものである。回答数 0 のア、イを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があった ($\chi^2 = 86.52$ d f = 2 $P < .05$)。さらに、ウを除いた二つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があり ($\chi^2 = 51.92$ d f = 1 $P < .05$)、オ「そう思わない」が多いことを示している。

表 2-1 質問 2 における回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	0	0	15	33	123	171

②質的側面

表 2-2 の「どちらとも言えない」2 名 (2/14) は、「どちらかと言えばそう思う」という内容に、そして 12 名 (12/14) は「どちらかと言えばそう思わない」内容に属するものであった。また表 2-3「どちらかと言えばそう思わない」25 名 (25/32) は、子どもの気持ちが大事としており、「そう思わない」という内容に属するものと思われる。

表 2-2 どちらとも言えない (14/15)

【大人が最善と思うことは、良い結果になる】 2 /14

- ・大人が最善だと思うことは良い結果になると思うし、その子なりにも考えることがあると思う。
- ・障害のある子どもに対しての対応も大事だけど、親の気持ちも考えて最善と思うことをあげなければならない。

【大人が最善と思うことと子どもの最善がずれていることがある】 2/14

- ・大人が最善だと思っていることが子どもにとっては違うことがある。
- ・大人が良かれと思ったことが、もしかしたら裏目に出るかもしれない。

【子どもの気持ちを踏まえたとうえで、大人の最善と思うことを行う】 10/14

- ・子どもの気持ちを考えることも大事であり、大人が最善だと思うことをしてあげることも両方大事である。
- ・子どもの気持ちを優先しつつ、大人が最善だと思うことをしてあげればよい。

表 2-3 どちらかと言えばそう思わない (32/33)

【大人が最善と思うことを行うことも否定できない】 2/32

- ・できるところまでやらせてあげて、できないことを大人が行えばいい。時には大人が最善だと思うことをしてあげればいい。
- ・長いスパンで見た時にその子のためにならないこともある。

【大人が最善と思うことを行うのも否定できないが、子どもの気持ちも大事】 5/32

- ・子どもの気持ちを考えることは一番であるが、時として大人が判断したほうが良いことがある。
- ・その子どもの気持ちを聞いてあげながら、その中で大人がいくつか提案を出してあげることが大切。

【子どもの気持ちが大事】 25/32

- ・最善だと思うことをさせるのではなく、様々なことを体験させ、子どもに選択肢を多くすることが出来るようにする。
- ・子どもの気持ちを予測して子どもの気持ちに添って援助することが大切。

表 2-4 そう思わない (122/123)

【子どもの気持ちを踏まえることが最優先】 122/122

- ・どんな子にも意思があるので、その子の気持ちをくみ取れるのは大人ができること。
- ・言葉にできないけどその気持ちをどうにかして伝えようとしている子どもの気持ちを受け止めることが大切。

(3) 質問 3

山田さん(仮名)は、大人が子どもの養育の責任をもつものだと考えています。大人が必要と思うことは子どもの気が進まないことでも従わせたほうが良いと思っています。

①量的側面

表 3-1 は、質問 3 に対しての回答数を表したものである。回答数 0 のアを除いた四つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差があった ($\chi^2 = 10.06$ d f = 3 P<.05)。さらにイを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差がなかった ($\chi^2 = 1.35$ d f = 2 n.s)。

表 3-1 質問 3 における回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	0	10	60	53	48	171

2 質的側面

表 3-3 「どちらかと言えばそう思う」 10 名、表 3-3 「どちらとも言えない」 58 名のうちの 18 名の計 28 名は、「社会生活に必要なことはさせる」としていた。

それに対して表 3-3 「どちらともいえない」 58 名のうちの 40 名、3-4 「どちらかと言えばそう思わない」 51 名そして表 3-5 「そう思わない」 47 名の計 138 名は、「子どもの気持ちを踏まえたうえで、やって欲しいことを説明する」としている。

表 3-2 どちらかと言えばそう思う (10/10)

【社会生活をする上で必要なことはさせる】 (10/10)

- ・子どもの気が向かなくてもこれから社会に出るうえで必要なことなら身に着けて欲しいから。

子どもの権利についての学生の認識

- ・必要と思うなら仕方ないと思う。やりたくないと言主張するならば、大人の待つ姿勢も大事。

表 3-3 どちらとも言えない (58/60)

【社会生活をする上で必要なことはさせる】

18/58

- ・気が進まないことでもその子のためになることはやらせた方が良くいから。
- ・社会で生きていくうえで本当に必要なことはたとえ気が進まなくても大事なことです。

【社会的に必要なことはやらせるが、それ以外は子どもの意思に委ねる】 40/58

- ・必要ならやるべきだが、できるだけ子どもの意志に添うようにする。
- ・大人が責任を持って育てることは大事だが、子どもの気持ちも大事にした方が良くい。

表 3-4 どちらかと言えばそう思わない (51/53)

【社会的に必要なことはさせるが、子どもの気持ちを聞き、説明する】 51/51

- ・養育の責任はあるが、無理にしていけない。
- ・無理強いはよくないが、必要なことであればやる気になれるようにした方が良くい。

表 3-5 そう思わない (47/48)

【子どもの気持ちを踏まえたうえで、やって欲しことを説明する】 47/47

- ・大人は責任を持つものだが、大人の子どもの気持ちも大切。
- ・こどもの気持ちに寄り添い、その子の発達にあわせて、大人も歩み寄って聴くことが大切。

(4) 質問 4

山田さん(仮名)は、大人がして欲しいかと思っていることを、子どもが行おうと、もしくは行っているとき、大人は子どもを説得し、止めさせたほうが良いかと思っています。

①量的側面

表 4-1 は、質問 4 に対しての回答数を表したものである。五つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差があった ($\chi^2 = 83.82$ d f = 4 P<.05)。さらにア、オを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差が見られ ($\chi^2 = 41.18$ d f = 2 P<.05)、ウ「どちらとも言えない」が多かった。

表 4-1 質問 4 における回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	17	30	81	26	17	171

②質的側面

表 4-2 「そう思う」 16 名、表 4-3 「どちらか」というとそう思う」 28 名、表 4-4 「どちらとも言えない」 81 名、そして表 4-5 「どちらかと言えばそう思わない」 24 名の計 149 名は、社会生活をする上で大人が子どもの行動を不適切とみなした時には、きちんと説明し、やめさせることが適切という内容になっている。

それに対し、表 4-6 「そう思わない」 16 名は、止めさせるのではなく、子どもの経験をとおして学ばせることが適切であるとしていた。

表 4-2 そう思う (16/17)

【いけないことはいけないと言うのが大人の役目】 16/16

- ・大人のしてほしくない理由があつて、説明し、説得する分にはいいと思う。
- ・説得し辞めさせることで、子どもが大人になった時にその行動をとらない。

表 4-3 どちらかと言えばそう思う (28/30)

【いけないことはいけないと言うことが必要】 28/28

- ・止めさせた方が子どもにとっても良いだろうと思うから。
- ・誰もが間違っていると思う行動ならしっかりと指導したほうがいい。

表 4-4 どちらとも言えない (81/81)

【内容にもよるが、社会的に見て不適切なことはやめさせる】 81/81

- ・して欲しくない内容が不明ですが、説得するなら良い。ただ大人の勝手に止めるのはよくない。
- ・させてあげた方が良いとは思うけど、して欲しくないことはさせてはいけない。

表 4-5 どちらかと言えばそう思わない (24/26)

【状況にもよるが、客観的に見て良くないことは止める】 24/24

- ・して欲しくない内容の限度によるが、正しくないことならば止めて欲しい。
- ・お店などで走り回ることなど周りに迷惑がかかることなら、しっかりと説明し納得させて止めさせるべき。

表 4-6 そう思わない (16/17)

【おとなの判断基準を子どもに当てはめるのではなく、経験を通して学ばせる】 16/16

- ・大人にとってはそうだけど、子どもにとったらどうかと一番考えるべき。
- ・単に大人がして欲しくないだけというのは間違っている。

(5) 質問 5

山田さん(仮名)は、自分勝手な親が子どもを養育するのは良くないので、子どもを施設などに入れた方が良いと思っています。

①量的側面

表 5-1 は、質問 5 に対しての回答数を表したものである。アを除いた四つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった ($\chi^2 = 14.46$ d f = 3 P<.05)。さらにイを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差が見られなかった ($\chi^2 = 4.03$ d f = 2 n.s)。

表 5-1 質問 5 における回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	1	8	66	49	47	171

②質的側面

表 5-2「そう思う」1名と表 5-3「どちらかと言えばそう思う」7名の計8名が、親子分離がいいとしていた。

それに対して表 5-4「どちらとも言えない」65名、表 5-5「どちらかと言えばそう思わない」

子どもの権利についての学生の認識

47名、そして「そう思わない」47名の計159名は、可能な限り親と生活させたいとしていた。

表 5-2 そう思う (1/1)

- ・親にはかわいそうだが、子どもの将来を考えると入れたほうがいい。

表 5-3 どちらかと言えばそう思う (7/8)

- 【自分勝手な親よりも施設での生活がいい】 7/7
- ・もし親が子どもを放置しているなら施設に入れた方がよい。
 - ・自分勝手な親の元での養育では、子どもの最善の利益を尊重することが出来ない。

表 5-4 どちらとも言えない (65/66)

- 【親の状況にもよるが、親との生活が望ましい】 65/65
- ・なるべく子どもは実の親と暮らすべきである。
この具合がネグレクトにつながる場合は施設入所もやむを得ない。
 - ・なるべく親のそばで養育することが良い。自分勝手の内容によって変わる。

表 5-5 どちらかと言えばそう思わない (47/48)

- 【可能な限り親との生活が望ましい、養育不適切なら分離も致し方ない】 47/47
- ・親と子には愛着関係が出来ているので、出来るだけ入れない方がよい。子どもが育てられなくなったら預けた方がよい。
 - ・親の自分勝手の度合いにもよるが、親と暮らすのが一番。

表 5-6 そう思わない (47/47)

- 【親を指導して親の元で生活させるべき、それができないときはしょうがない】 47/47
- ・乳幼児の親との関係は重要なことになる。引き離さなければならない状況以外はダメ。
 - ・本来は家庭の中で育つべきだと思う。子どもの命に危険が及ぶ場合は、引き離すべき。

(6) 質問 6

山田さん(仮名)は、物事を決める時、子どもの意見を聴くと時間がかかるので、子どもの意見を聞かずに大人が決めたほうが良いと考えています。

①量的側面

表 6-1 は、質問 6 に対しての回答数を表したものである。ア、イ、ウの三つの項目を除いた二つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があり ($\chi^2 = 108.8$ d f = 1 $P < .05$)、オ「そう思わない」が多いことを示している。

表 6-1 質問 6 への回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	0	0	1	17	153	171

②質的側面

質問 6 に対して、表 6-2「どちらとも言えない」1名を除き、表 6-3「どちらかと言えばそう思わない」17名と表 6-4「そう思わない」151名の計168名は、子どもの話を聞くことが大切としていた。

表 6-2 どちらとも言えない (1/1)

【必ずしも聞く必要はない】

- ・聞いた方がいい時と聞かなくていい時がある。

表 6-3 どちらかと言えばそう思わない (17/17)

【子どもの話をきくことが大切】 (17/17)

- ・時間がかかるけど聴くことが良い。決まり難かったら大人の意見を言い、その上で決めるといい。
- ・子どもの意見を聴いたうえで、子どもが納得できるような言葉がけをした方が良い。

表 6-4 そう思わない (151/153)

【子どもの話をきくことが大切】 (151/151)

- ・時間がかかっても子どもの意見を聴いて反映できることは反映すべき。
- ・それぞれ意見が違うし、子どもも一人の人間だから意見を聴くべき。

(7) 質問 7

山田さん(仮名)は、子どもに「自分の意見を言う権利」があることを教えると、好き放題なことを言いだすと困るので、教えない方が良くと考えています。

①量的側面

表 7-1 は、質問 7 に対しての回答数を表したものである。「そう思う」を除いた四つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差があった ($\chi^2 = 174.63$ d f = 3 $P < .05$)。さらに「そう思う」「どちらかと言えば

そう思う」「どちらとも言えない」を除いた二つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差がみられ ($\chi^2 = 80.22$ d f = 1 $P < .05$)、オ「そう思わない」が多かった。

表 7-1 質問 7 への回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	0	0	9	24	138	171

②質的側面

χ^2 検定の結果が示している通り、質問 7 に対しては、表 7-2 「どちらとも言えない」9 名は話を聴くが、必ずしも言う必要はないとしており、表 7-3 「どちらかと言えばそう思わない」23 名、表 7-4 「そう思わない」134 名の計 157 名は、子どもに自分の意見を言う権利があることを教える必要があるとしていた。

表 7-2 どちらとも言えない (9/9)

【子どもの話は聴くが、その権利があることを必ずしも言う必要はない】 9/9

- ・「自分の意見を言う権利」があることを伝えずに子どもの意見を聞いてもいいと思う。
- ・自分の意見を伝えるのも大切だが、自分勝手なことを言う子もいるので限度を教えるのは難しい。

表 7-3 どちらかと言えばそう思わない (23/24)

【自分の意見を言える権利があることを教える必要はある】 2/23

- ・教えずにいると自分の意見が言えず他人に押し流されてしまう人になってしまいます。
- ・自分の意見を言える子には言わなくてもよいが、言えない子にはいうべき。

子どもの権利についての学生の認識

【自分の意見を言える権利があること、その意味を子どもに伝える必要がある】

21/23

- ・好き放題というのは子どもだから当たり前。そうした時どうすべきかを大人が考えられるようになればいい。
- ・自分の意見を言うことは大切だが、相手の気持ちを考えて発言することを教えないといけない。

表 7-4 そう思わない (134/138)

【自分の意見を言える権利があること、その意味を子どもに伝える必要がある】

134/134

- ・好き放題言うのは自由であって、好ましくないことを言ったら指導すればいい。
- ・権利はしっかりしておくべき。好き放題いこうかどうかは教育のやり方次第。

(8) 質問 8

山田さん（仮名）は、頻繁に盗みや乱暴などをする子どもは、行動の善悪を理解していないと思っています。

①量的側面

表 8-1 は、質問 8 に対しての回答数を表したものである。五つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差があった ($\chi^2 = 61.95$ d f = 4 $P < .05$)。さらにア、イを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5% 水準で有意差が見られなかった ($\chi^2 = 2.95$ d f = 2 n.s.)。

表 8-1 質問 8 への回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	7	13	52	41	58	171

②質的側面

表 8-2「そう思う」7 名と表 8-3「どちらかと言えばそう思う」12 名のうちの 10 名の計 17 名は、大人から教えられていない、若しくは善悪を分かっているとしていた。

それに対して、表 8-3「どちらかと言えばそう思う」うちの 2 名、表 8-4「どちらとも言えない」52 名、そして表 8-5「どちらかと言えばそう思わない」41 名、そして表 8-6「そう思わない」56 名の計 151 名は、問題行動の善悪を教えられていないというより、行動の背景に心理的な要因が関係しているとしていた。

表 8-2 そう思う (7/7)

【大人が子どもに良いこと悪いことを教えていない】 7/7

- ・行動の善悪を大人がきちんと伝えていないから頻繁にそのような乱暴を行ってしまう。
- ・きちんと指導されていないから善悪がはっきりと分かっていない。

表 8-3 どちらかと言えばそう思う (12/13)

【いけないことだと分かっていないと思う】 10/12

- ・悪いことを悪いと思っていないからそういうことをするのだと思う。
- ・なぜだめなのか教えることが必要。悪いと思って行うのであれば、一度強く言う。

【問題行動を起こす理由がある】2/12

- ・何らかの理由があっても盗みなどはいけない。理由を聞いていけないことだと伝える。
- ・理解していないと思うけど、そこには何らかの理由がある。その解決から始めるべき。

表8-4 どちらとも言えない (52/52)

【理解していない子、理解しているが大人へのサインとして行う子がいる】52/52

- ・本当に理解せずにやっている人もいれば、何かしらの理由があって情緒不安定な状態になってやっている場合もある。
- ・本当に善悪を理解していない子もいるが、悪いことをすることで、注目してほしいと思う子もいる。

表8-5 どちらかと言えばそう思わない (41/41)

【悪いことだと分かっているが、子どもからの大人へのサイン】41/41

- ・分かっているけど構って欲しい誰かに相手にして欲しくてやってしまうのではないかと思う。
- ・ここに何かを抱えているのかもしれない。その子の置かれている環境をしっかり見てあげるべき。

表8-6 そう思わない (56/58)

【悪いことだと分かっているが、子どもからの大人へのサイン】56/56

- ・理解していてもやる子はたくさんいる。見て欲しか。

- ・その行為をすることで何かを主張しようとしている。気にかけて欲しいとか。

(9) 質問9

山田さん(仮名)は、子どもに善悪を教えるために、いけないことをしたときに叩くなどの行為により、して良いこと悪いことを教えることが良いと思っています。

①量的側面

表9-1は、質問9に対しての回答数を表したものである。ア、イを除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ5%水準で有意差があり($\chi^2 = 181.89$ d f = 2 $P < .05$)、オ「そう思わない」が多かった。

表9-1 質問9への回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	2	3	9	20	137	171

②質的側面

表9-2は、質問8と9の関連性を示したものである。表9-3は子どもがいけないことをした時に、【叩くことで教えることの方が、子どもにとって分かりやすい】とした学生が2名いたが、そのうち1名は質問8では親等から教えられていない、もう1名は心理的要因が背景にあると回答していた。同様に、表9-4では【叩いて教えることも致し方ない】とした学生3名のうち2名は、質問8では親等から教えられていない、そして1名は心理的要因が背景にあるとしていた。そして表9-5【本当にいけないことをした時、言葉で言って分からないときには必要】とした学生9名は、

子どもの権利についての学生の認識

質問 8 では心理的要因が背景にあるとしていた。

統計的には、叩くことによるしつけは有意に少なかったが、質問 8 において問題行動の発生機序が心理的要因にあるとした 11 名に対して、悪いことをした時には叩くことも致し方ないという記述であった。

表 9-2 質問 8 と 9 の関連

表 9-1	数	質問 8 (記述類別内容)
ア	2	1 親から教えられていない
		1 心理的要因
イ	3	2 親から教えられていない
		1 心理的要因
ウ	9	心理的要因

表 9-6 「どちらかと言えばそう思わない」 19 名、そして表 9-7 「そう思わない」 132 名の計 151 名は、子どもが問題とされる行動を起こしたとしても、叩いて教えることに対しては意味がないことを記述していた。

表 9-3 そう思う (2/2)

【叩くことで教えることの方が、子どもにとって分かりやすい】 2/2

- ・ 良いこと悪いことを教える方が良い。
- ・ 子どものそちらのほうが善悪の判断が付きやすいと思う。

表 9-4 どちらかと言えばそう思う (3/3)

【叩いて教えることも致し方ない】 3/3

- ・ 良いとは思えないが、そのような方法で善悪を教えるというのもなくはないと思う。
- ・ 実の子どもならいいと思う。そうやってしつけをして貰ったし、愛情も感じた。

表 9-5 どちらとも言えない (9/9)

【本当にいけないことをした時、言葉で言って分からないときには必要】 9/9

- ・ 時と場合に叩いて伝えることも私は必要だと思います。
- ・ ことばで言って分からないときは叩くこともある。

表 9-6 どちらかと言えばそう思わない (19/20)

【叩くことで良いこと悪いことを教えるのは効果が少ない】 19/19

- ・ 「痛いことをされるからしない」など教え方がおかしい。
- ・ 暴力はいけない。声の低さ、口調や音量を変えるだけでもだいぶ子どもにもわかる。

表 9-7 そう思わない (132/137)

【叩いて教えようとしても、そのいけないことの理由が伝わらない】 132/132

- ・ 叩かれるから悪いことをしない子になってしまう。
- ・ 叩いても意味が分からなければ駄目なので、ことばで説明すべき。

(10) 質問 10

山田さん(仮名)が勤務をしている学校で運動会があり、身体に障害のある 10 歳の子どもが、クラスの対抗リレーに出たいと言っています。しかし、その子が出ると負けるので、山田さんは、子どもの気持ちを考慮せずに、出さないほうが良いと考えています。

①量的側面

表 10-1 は、質問 10 に対しての回答数を表したものである。「そう思う」「どちらかと言えばそう思わない」を除いた三つの回答項目の χ^2 検定を行ったところ 5%水準で有意差があり ($\chi^2 = 173.71$ d f = 2 P<.05)、オ「そう思わない」が多かった。

表 10 - 1 質問 10 への回答

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	計
数	0	0	11	22	138	171

②質的側面

表 10-2「どちらとも言えない」10 名、表 10-3「どちらかと言うとそう思わない」22 名うちの 14 名、表 10-5「そう思わない」135 名のうちの 31 名の計 55 名は、障害のある子どもの気持ちだけでなく、その子を取り巻くクラスの子もたちの気持ちも視野に入れて相互の意見を踏まえて、より良い知恵を出したほうが良いというものだった。

それに対して表 10-3「どちらかと言えばそう思わない」22 名うちの 8 名、そして表 10-5「そう思わない」135 名のうち 104 名の計 112 名は、障害をもっている子どもの気持ちを最優先して、クラス対抗リレーに出す方がいいというものであった。

表 10-2 どちらとも言えない (10/11)

【障害のある子の気持ちとクラスの他の子どもの気持ち】 10/10

- ・クラスの子が良いと言えば出してあげるし、もし駄目だったらその子に出られないことを伝える。
- ・出してあげたいけど、他の子の気持ちを考えたらどちらとも言えない。

表 10-3 どちらかと言えばそう思わない (22/22)

【障害の子どもの気持ちを優先】 8/22

- ・子どもの気持ちを最優先に尊重してあげるべき。
- ・やりたいという気持ちを尊重する。

【クラスの子どもの意見を聞き、みんなでその子にとってできることを考える】

14/22

- ・子どもの気持ちを考えれば出すべきだが、他の子どもの気持ちも無視できない。
- ・クラスの子とも話し合い、みんなで決めるなど子どもの気持ちを考慮することは必要。

表 10-4 そう思わない (135/138)

【障害のある子どもの意向を尊重する】

104/135

- ・子どもの気持ちを考え、出られるようにしてあげる。
- ・その子が出たいという思いを大切にしたい。

【意向を尊重するとともに、クラスで話し合う】 31/135

- ・クラスで話し合って、クラスみんなで決めるのが良い。
- ・出たいという気持ちを尊重し、周りの子たちとどうすればいいか考えたほうが良い。

4 考察

質問 1 では、「第 2 条 差別の禁止」と「第 12 条 意見表明権」を柱として聞いたものである。学生の多くは、子どもの意見を最優先すべきであるという反応がなされていた。し

かし、そのことと併せて差別の禁止をとりあげた学生は18名と少なかった。確かに子どもの意見を尊重することは言うまでもないが、それと同等に「差別の禁止」も重要である。その二つを軸にして「第5条 保護者の支持及び指導の尊重」が織り込まれて、「第3条 最善の利益」につながっていくものと思われる。

このようにひとつの要素だけでなく、多面的な意味合いの基に考えることが必要である。

質問2では、「第3条 子どもの最善の利益」と「第12条 意見表明権」を聞いたものである。乳幼児や発語の乏しい障害のある子どもは、何ら自分の気持ちを出していないとするか、そうでないとするかで第3条と第12条の両方が関係するかもしれないが決まってくるが、今回のアンケートでは、多くの学生が乳幼児や障害児にも自分の気持ちがあるので、それを出来る限り大人は感じ取り、そのうえで子どもにとって最善の利益が図られるようにすべきとしていた。乳児の泣く行動、障害のある子どものパニックなどにおいても、訴えていることがその行為の中に内包していると考えていることになる。それをどう受け止めるかは大人側の感性に委ねられている。つまり乳児や障害の子どもであっても、「ああではないか」「こうではないか」など一生懸命に子どもに寄り添い、子どもの表情などを読み取り、子どもの反応を確認することが必要である。また、これについては、他の教科「保育の心理学」等の学びと関連付けて子どもの行為を一体的に理解するような学びが必要になる。

質問3の「第5条 保護者の支持及び指導の尊重」は、子どもの最善の利益の視点から望ましくないと判断した時には、大人の責任で助言し、指導しなさいというものである。そういう意味で、「どちらかと言えばそう思う」10名と「どちらとも言えない」の理由を書いた18名の計28名は、内容的には大人の責任で従わせるというものであった。

しかし、「第12条（意見表明権）」がある以上、子どもの気持ちを十分に聞いて、子どもが納得する形での指導が求められることになる。本研究では、「どちらとも言えない」58名のうち40名、「どちらかと言えばそう思わない」51名そして「そう思わない」47名の計138名は、子どもの気持ちを聴き、若しくは踏まえたうえで、大人がして欲しいことを伝えていく必要があるとしていた。

筆者は児童相談所に勤務していた時、これに類する事例に幾度となく出会っている。それは虐待等で保護者と生活させることが出来ないと児童相談所が判断し、子どもを家庭から分離し、施設入所がいいと判断した時、そのことを子どもに説明するときのことである。子どもに施設入所への意向を聴くと、多くの子どもは「家に帰りたい」「お母ちゃんと暮らしたい」と言う。このような時、「お家とは別なところで生活したほうが良いと、会議で決まったから」と言うのではなく、今までのことを子どもと共に振り返り、子どもそして保護者にどうなって欲しいかを時間をかけ説明し、子どもの気持ちを聴き、子どもが納得して新しい生活のスタートをきれるようにすることが大切である。このことは子どもからす

れば、この人は自分の気持ちを受け止めてくれていると実感し、次のステージに進むスプリングボードになることがある。

質問 1 と同様にこの事例においても、「第 5 条 保護者の支持及び指導の尊重」という次元のみの対応でなく、「第 12 条（意見表明権）」を併せて丁寧に子どもと関わることが望ましいと思われる。勿論これは、関わる大人が子どもの権利を大切に、最善の利益を図るという視点があって始めて出来ることである。

質問 4 では、質問 3 と関連した設問で、ここでは一方的に子どもを従わせるのではなく、その年齢に子どもにあった説明し、説得するというものである。この時に、大人がして欲しくないことへの具体的な記載がなかったことから、回答のばらつきがあったが、記述内容の大半は、「社会生活するうえでの望ましくない行動」という限定で、そうすることが良いとの内容であった。その意味で、多くの学生は、的確に質問 4 の意味を捉えていると思われた。

質問 5 では、「第 9 条（親からの分離の禁止と分離に関する規定）」と「第 18 条（養育・発達の一義的責任と国の援助）」を踏まえて親子不分離の原則を確認している。この設問での山田さんが思う親の自分勝手さが、子どもにどのような不利益かが曖昧であるが、親子不分離の原則、そして親子一緒に生活できるように周りからの支援が必要とされる。そういう意味で、アンケートの回答した学生は、的確に親子不分離の原則を念頭に置いていたと思われた。

質問 6 では、「第 12 条（意見表明権の確保）」

を聞いている。アンケート結果は、「どちらかと言えばそう思わない」と回答した 17 名と「そう思わない」と回答したうちの 151 名の計 168 名は、子どもの話をきくことが大切としており、第 12 条を踏まえて適切に回答していると思われた。

質問 7 では、質問 6 に関連しているが、「第 12 条（意見表明権）」と「第 5 条（保護者の支持及び指導の尊重）」を聞いている。それゆえ、子どもが好き放題いうのも可とする前提である。すべての学生の回答は、子どもの意見を聴くという姿勢であるが、そのなかの 155 名は、子どもが好き放題言ったとしても、それを軌道修正するのが「第 5 条（保護者の支持及び指導の尊重）」であると的確に理解していると思われた。

質問 8 では、「第 18 条（養育・発達の一義的責任と国の援助）」に関係していることを聞いている。ここでは、アブラハム マズローの言う欲求五段階説を質問 8 の内容と関連付けてみたい。マズローは、欲求の最下層に生理的欲求、その上に安心安全の欲求（心理的欲求）そしてその上に帰属・愛情の欲求を欲求段階の三下層に挙げている。この三下層の欲求は欠乏欲求と言われるもので、子どもが生活するうえで養育する大人から充足されるべきものであり、権利でもある。子どもが何らかの理由でこの欲求を充足されない、若しくはされなくなった時に、大人への注意喚起のひとつとして問題行動を起こすと言われていた。このことと 20 歳未満の非行少年が起こした行為に対して、罰としての量刑ではなく、保護的支援をとっていることとは密接に関係

子どもの権利についての学生の認識

している。つまり子どもの非行は、適切な養育環境で育成されない結果で、育成環境を整えることによって立ち直るという考え方によるものと言える。この点、多くの学生は、他の教科の学びをとおして盗み等の問題行動は、子ども親との間の心理的な問題が介在しているという認識をしていることがうかがわれた。質問9では、質問8の結果として子どもが問題行動を起こした時の大人の対応を聞いている。今回のアンケート結果では、子どもの示す問題行動に対して、体罰を用いることは統計的に有意に不適切という結果を示めていた。

しかしながら体罰をすることもやむを得ないとしたものが14名おり、そのうち11名は、問題行動の背景として心理的な理由が介在しているとしているものの体罰を肯定していたが、「第19条（保護者の虐待・放任・搾取からの保護）」に示されているようにいかなる場合も体罰等は用いてはならないものである。特に、質問8で見てきたように反社会的な行動を子どもなりの周りへの訴えとして捉えるなら、その子どもの行為に対して暴力などで対応すると、ますます悪化の一路をたどることになる。ここは関わる大人は、子どもの行動の意味を理解し、気持ちを受け止めて関わるのが子どもの最善に利益につながることを学ぶ必要がある。

質問10では、統計的に有意な回答は、障害を持っている子の気持ちを最優先したいという考え方であったが、クラスにはその子ども以外の子もいる。その他の子どもの気持ち（「第

12条（意見表明権）」を聴くことも必要なことであり、その結果として「第3条（児童の最善の利益）」が図られることになると思われる。つまり障害の子どもの気持ちを大事にし、さらには他の子どもたちの意見も聴くことで一番いい方法をみんなで知恵を出し合っていくこととも言える。

この設問においても、第12条（意見表明権）と第23条（障害児の尊厳・権利の確保）の二つの次元を踏まえて考えることが、第3条（子どもの最善の利益）を図るため必要不可欠になってくると思われる。勿論、このように障害を持っている子どもの気持ち、そしてその子を取り巻く子どもの気持ちを聴いて、子どもたちが工夫しあうということが出来る背景には、日ごろのクラス担任自身の中の児童観が反映することは言うまでもことである。

5 まとめ

アンケートの10の設問構成は、表11にあるように関連する複数の権利や他の教科での学びを連動させて回答するものであった。

表11 質問の構成

質問	関係条文等
1	第2条 差別の禁止 第3条 児童の最善の利益 第5条 保護者の支持及び指導の尊重 第12条 意見表明権
2	第3条 子どもの最善の利益 第12条 意見表明権 保育の心理学等

3 4	第 5 条 保護者の支持及び指導の尊重 第 12 条 意見表明権
5	第 3 条 児童の最善の利益 第 9 条 親からの分離の禁止と分離に関する規定 第 18 条 養育・発達の一義的責任と国の援助
6 7	第 3 条 児童の最善の利益、 第 5 条 保護者の支持及び指導の尊重、 第 12 条 意見表明権
8 9	保育の心理学等 第 3 条 児童の最善の利益 第 5 条 保護者の支持及び指導の尊重 第 12 条 意見表明権 第 19 条 保護者の虐待・放任・搾取からの保護
10	第 3 条 児童の最善の利益 第 12 条 意見表明権 第 23 条 障害児の尊厳・権利の確保

今回の結果を見る限り、多くの学生は、子どもの権利に関して各条文の認識を適切にしていると思われた。しかしながら設問 9 の「子どもがいけないことをした時に、叩いて教える」ことに対しては、効果がないと回答した学生が多かった（統計的に 5%水準で有意差あり）。しかし、このことは 5%水準での過誤、つまり山田さん（仮名）のように思う人がいることを意味している。子どもがいけないことをした時に叩く大人の気持ちとして、大人の責任として、子どもに社会文化を身につけ

させたいという気持ちからと思われるが、どのようにその行為を正当化しても、叩くときには大人の怒りの表出である。日ごろ子どもの権利を尊重し、関係が形成されていれば、子どもの気持ちを理解し、関わる大人の思いを伝えることで意図することが伝わるはずである。

そのためいかなる場合でも、学生にはこの叩くなどの体罰は子どもの健全な発達に害があることを理解させることが必要である。

また、現実場面では、設問 10 のようにひとりの子どものこと、そしてその子どもを取り巻く複数の子どものことを同時に考えなければならないことがある。そのような時、多面的に子どもの権利を捉え、子どもにとっての最善の利益を図るための方策を考えられるような学びをすることが必要である。

6 今後に向けて

今回の研究の発端は、職員に蹴られるなどして障害のある子が死亡するなどに類した新聞記事が後を絶たないこと、そして事件には至らないが保育園や幼稚園で保育士等が子どもに心傷つくような言葉を投げかけている、ということを実習に行った学生から耳にしたからである。

子どもの権利を大切にすることは、1994 年に日本がこの条約を批准したからではなく、発達途上にある子どもに必要不可欠なことだからである。ここでいう発達途上というのは、個々の子どもが周りから受け入れられているという認識を持ち、そして自分も周りの人の存在を認め、相互に織りなす生活をとおして

子どもの権利についての学生の認識

生き生きとした自分を構築する道程であることを意味している。

特に子どもの権利が守られるということは、社会的養護を必要としている子どもにとっては、その後の発達を左右するものと言っても過言ではない。社会的養護とは、本来親が一義的に子どもの養育をすることが何らかの理由でできなくなった時、若しくは養育させることが不適当な時に国もしくは地方公共団体が親に代わって子どもの養育することを意味している。そういう意味では、社会的養護を必要としている子どものなかには、虐待等の悲惨な養育過程を経て、施設入所している子どももいる。そのような子どもの中には、自分がいけない子だから親から叩かれ、施設に入れられたと思い、気持ちを抑制して本来の力（エンパワメント）を発揮できず、そして自己肯定感も低下させてしまっている子どももいる。その結果、関わる人との温かい感情交流をすることも難しく、そればかりか周りを困らせる行為をすることもある。

そのような時、関わる大人が子どもの権利を大切にするという切り口で子どもの話を聴き、気持ちを代弁し（アドボカシー）、さらには責任ある大人としての意見を言う関わりが大切である。その結果、子どもが他者から受け入れられているという実感を持ち、自分が価値ある存在だという認識のもとに自分の思っていることを主張し、かつ相手の言い分にも耳を傾けることが出来るようになる。それは抑制された気持ちが弱まり、様々な事柄に取り組もうとする状態とも言える（レジリアンス）。

今回の授業は、別紙資料のシラバスに基づいて行った社会的養護内容Ⅰである。この社会的養護では、今まで以上に学生が子どもの権利に注視し、社会的養護を必要としている子どもはもとより、全ての子どもにとって必要なことであるとの認識を深められるような授業を展開することが求められる。

7 参考文献

大塚良一 小野澤昇 田中利助監修 「子どもの生活を支える社会福祉」 ミネルヴァ書房、2015年3月

資料

社会的養護内容Ⅰ（シラバス抜粋）

内容 回数	事前学習	授業内容	事後学習
1	オリエンテーション（特になし）	15回の概要説明	
2	課題 アドボカシーの意味を調べる	社会的養護について①	
3	課題 エンパワメントの意味を調べる	社会的養護について②	
4	演習（P11）に取り組む	児童の権利 ①	
5	演習（P37, 44）に取り組む	児童の権利 ②	
6	演習（P47, 57）に取り組む	保育士の倫理及び責務	
7	P119 から 128（里親）を読み、問題点を整理する	社会的養護の体系	
8	「施設実習ファイル」養護施設を読み、明確にしたい内容を整理する	施設の生活 ①	
9	演習（P67, 72）に取り組む	施設の生活 ②	
10	演習（P75, 81, 84）に取り組む	施設の生活 ③	
11	演習（P94）に取り組む	施設の生活 ④	
12	演習（P100, 107）に取り組む	施設の生活 ⑤	
13	演習（P167）に取り組む	保育士の専門性（ソーシャル・ワーク）	
14	社会的養護の今後の課題	今後の課題	
15	まとめ	まとめ	

使用テキスト

吉田真理 編著 児童の福祉を支える社会的養護内容 萌文書林 2013 年 9 月